

伝白石古墳群内出土の寄贈資料について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文学部考古学研究室 公開日: 2023-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤,直樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000063

資料紹介

伝白石古墳群内出土の寄贈資料について

齋藤 直樹

はじめに

本市教育委員会には、白石古墳群出土と伝えられる考古資料が数多く寄託・寄贈されている。出土地点が明確なものとして、十二天塚古墳出土の石製模造品および土器類などがあるが(志村 1989, 2019)、そのほかに白石地内より出土したとされるが帰属古墳が明確でないもの(以下、伝白石古墳群出土資料)も存在している。本稿ではこれらを紹介しつつ、帰属古墳についても検討を行いたい。

I. 白石古墳群とは

白石古墳群は藤岡市北西部に南北約3kmにわたり広がる古墳群で、国史跡の白石稻荷山古墳と七奥山古墳をはじめ、本市域の古墳のうち20%近くが本古墳群に属している。西は鑓川、東は鮎川・猿田川により形成された河岸段丘上に築造されている。

段丘はその地形から大きく三面に分かれ、下段には模様積み石室を持つ伊勢塚古墳が所在するほか、中段には古墳時代中期から終末期にかけて本古墳群の大多数が築造されている。また上段では、北に平井地区1号古墳や皇子塚古墳、中央には白石稻荷山古墳が位置し、周囲には十二天塚古墳・十二天塚北古墳など中期古墳が集中する。南には、大型の凝灰岩を用いた截石切組積の横穴式石室を有する喜蔵塚古墳が所在している。

II. 伝白石古墳群出土資料について

本稿で扱う資料は、寄贈者からの口述などにより、受入時点で白石古墳群出土とされているものである。

(1) 伝白石古墳群出土 円筒埴輪

白石古墳群出土として収蔵されている円筒埴輪である。多条突帯の円筒埴輪とみられるが、2条目の突帯より上を欠失しており、上端の破断面は研磨され平滑になっている。残存高33.3cm、底径27.4cmである。透孔は確認できず、外面は触るだけで表面が剥離してしまう

ほど風化が激しく、わずかに一次タテハケ調整を確認するにとどまる。底部調整は行われなかったものとみられる。内部は右斜めのナデ調整で、上部は縦方向のナデ調整である。全体的に丁寧な調整が行われているものの輪積み痕が一部で認められる。

(2) 伝白石古墳群出土 馬形埴輪

図3-1は馬形埴輪頭部で口先から目にかけて残存している。耳およびタテガミについて形状および成形方法は明らかでない。口先は平坦で、輪積みや内部調整から、口先を底として円筒状に輪積みで成形していることがわかる。内面調整の方向や輪積みの向きが口先から15cmほどの位置で変化しており、頸部から連続成形したU字形の頭部と別作りした円筒状頭部を後で接合したことがうかがえる。なお、下顎部の粘土端部は折り返され丁寧にナデ調整が施されている。下顎骨を立体的に表現す

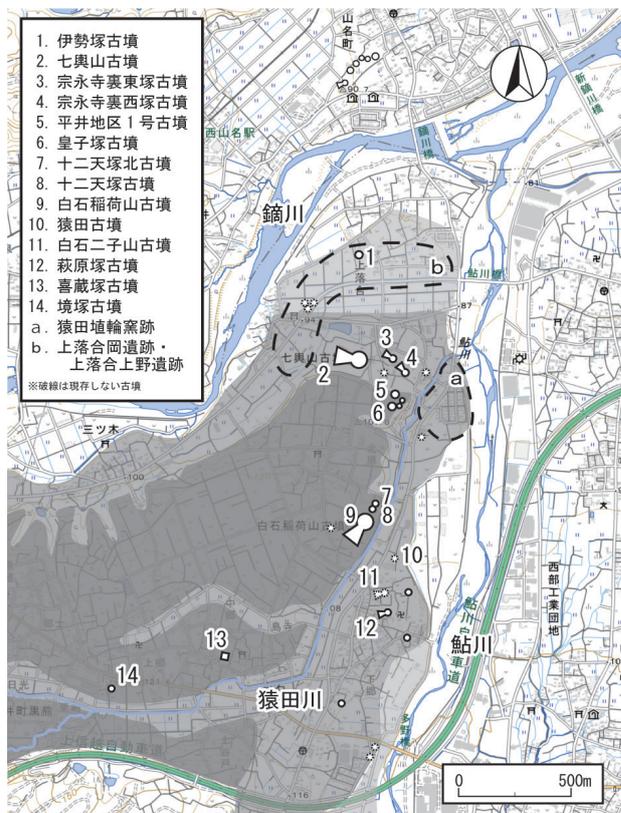


図1. 白石古墳群

るための粘土板の貼り付けはほとんど行われておらず、わずかに粘土紐が付加される程度である。

外面は一次ハケ調整を行ったのち部分的にナデ調整を施している。細部の表現をみると、口部は深い切り込みにより表現されているが、一部は轡の貼付後に切れ込みの入れ直しを行っている。また、鼻孔は穿孔後に外面ナデ調整により平滑に仕上げられている。調整の前後関係から、鼻孔は面繫などの貼付後、頭部成形でも最終段階におこなわれたとみられる。目は円形で、眼窩の立体的

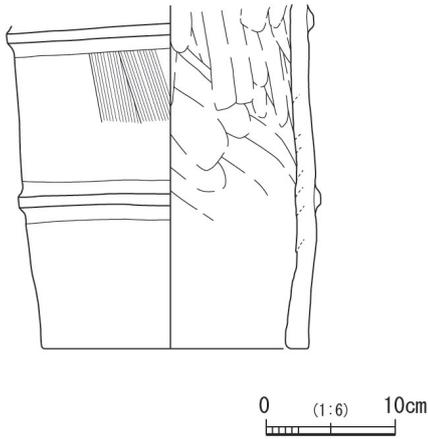


図2. 伝白石古墳群出土資料 円筒埴輪

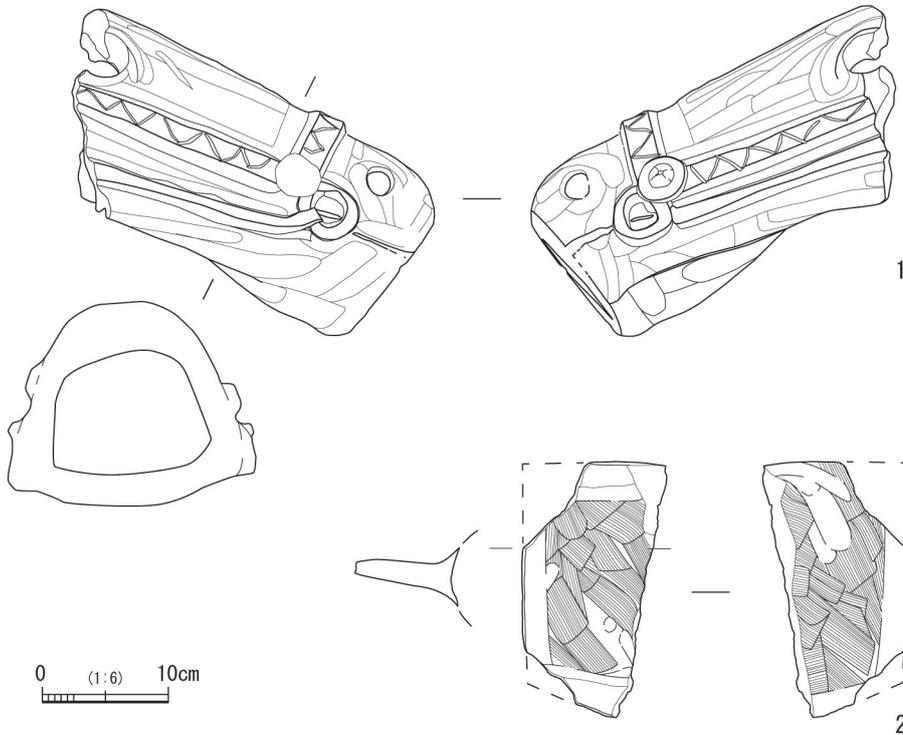


図3. 伝白石古墳群出土資料 形象埴輪

な表現をおこなうために粘土が付加されている。

面繫は2cm程度のやや幅広の粘土紐がナデにより張り付けられ、ヘラ状工具により薄く鋸歯文が刻まれている。轡は環状鏡板で、引手を轡上面に被せて貼り付けることで立体的に表現している。面繫には中央につまみのつく円盤状の装飾が貼り付けられている。

(3) 伝七輿山古墳出土 器財埴輪 (図3-2)

伝七輿山古墳出土とされる器財埴輪片である。上下端部が欠損しているものの部分的に残存していることから台形の板状に復元でき、その形状から鞍形埴輪の矢筒部上板とみられる。外面はほぼ全面がハケ調整で、表面左端部には縦方向のナデ調整が認められる。また、表面の上下端部にはそれぞれ2cm程度の粘土紐が剥離した痕跡が認められ、それぞれ貼り付けのためのナデ調整も確認できる。

III. 寄贈資料の位置づけについて

本報告において扱った資料のうち(3) 伝七輿山古墳出土資料については、現状では積極的に否定するだけの論拠がないことから、七輿山古墳出土として扱うこととし、残る円筒埴輪と馬形埴輪について若干検討を行いたい。

結論からいえば、いずれの資料も帰属する古墳を明示

することは極めて難しい。しかしながら、円筒埴輪については、多条突帯で底径27.4cmとやや大型の資料であることが参考となろう。藤岡市に限らず、古墳時代中期の西毛地域では墳形、規模に応じて樹立する円筒埴輪に一定の規範が認められるようになることが知られている(山田2008、若狭2015ほか)。この時期において4条を超える円筒埴輪の樹立が許されたのは井出二子山古墳や保渡田八幡塚古墳などごく一部に限られている。やがて七輿山古墳の築造を境に円筒埴輪の大型化、多条化が進んでいくが、後期でも白石古墳群において円埴が樹立する円筒埴輪は2条ないしは3条で¹⁾、4条を超える多条の円筒埴輪の出土は確認されていない²⁾ことから、いずれも前方後円埴に樹立されていた可能性が高い。白石古墳群においては、稲荷山古墳を端緒として古墳築造が開始されて以降、宗永寺裏東塚古墳、同西塚古墳(ともに5世紀後半)、七輿山古墳(6世紀前半)、萩原塚古墳、二子山古墳(6世紀後半)と5基の前方後円埴が知られているが、中期古墳への多条突帯円筒埴輪の樹立が想定しにくいことから、七輿山古墳以降の三古墳のいずれかへ樹立されたものと考えられる。七輿山古墳の円筒埴輪は多条突帯で貼付口縁と低位置突帯を有するも

のほかに、そうした特徴を持たない小ぶりな円筒埴輪も出土している。しかし、いずれも本資料と色調が異なり硬く締まった焼き上がりであることなどが特徴的で、また七輿山古墳の小型円筒埴輪は上下に波打つ歪んだ突帯貼付や調整の粗雑さなど、稚拙な製作技術が目立つことから、本報告資料との差異がきわめて大きい。残る2古墳への樹立を認めうるだけの論拠は乏しいものの、宗永寺裏東塚古墳、同西塚古墳、七輿山古墳への樹立を認めがたいことを踏まえるならば、6世紀後半の2基の前方後円埴のいずれかへ樹立されたものであると考えられよう。

群馬県域における馬形埴輪については、近年資料集成や考察が進められている(三浦2017、横澤2017)。三浦茂三郎は古海松塚11号埴例を第I期(TK208段階)とし、以降、第II期を5世紀後半(TK23・47段階)、第III期を6世紀前半(MT15・TK10段階)、第IV期を6世紀後半(TK43・209段階)として時期設定を行い、各時期における製作技法や馬装の変遷を詳細に検討している。同論文によれば、本稿紹介の馬形埴輪は口先を窄ませながら解放成形しているが、これは第III期に多く確認されている技法とされる。その一方で、馬装にみられる

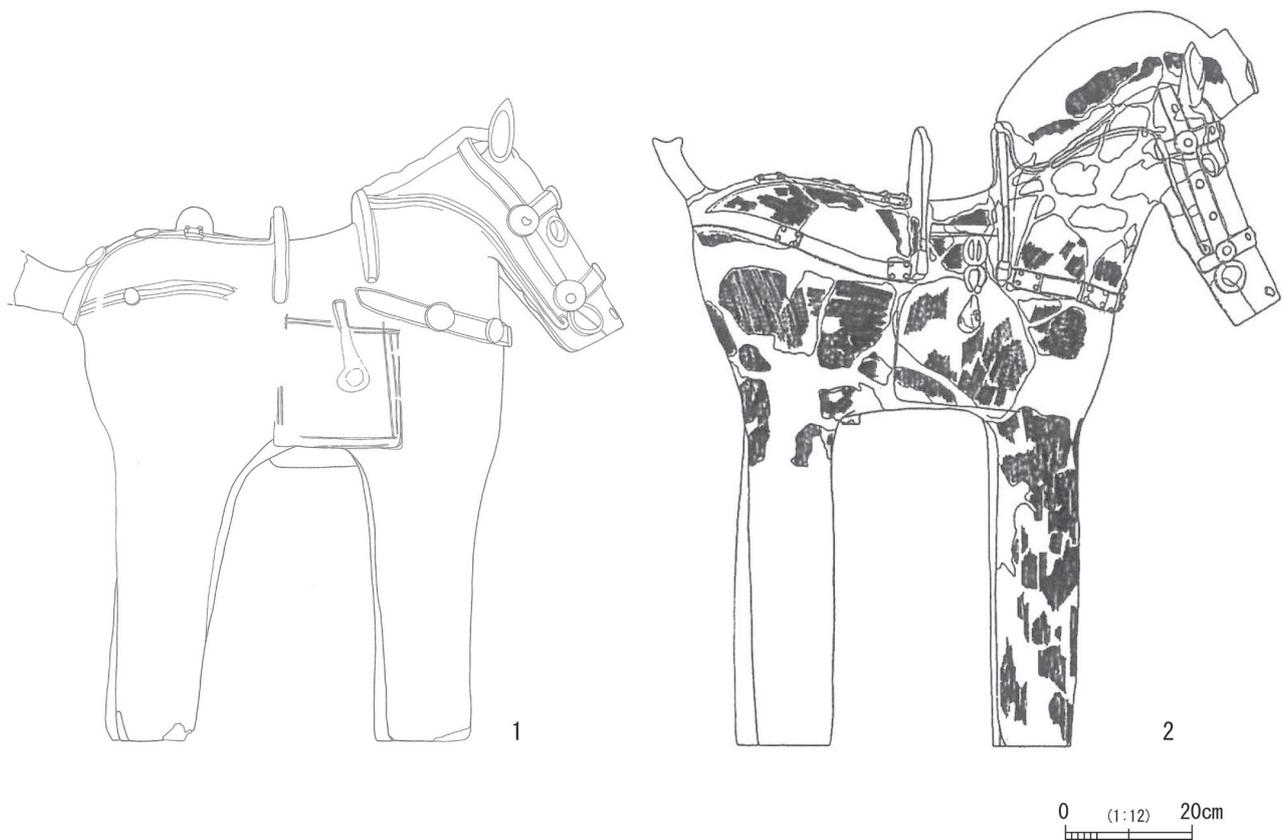


図4. 類似する頭部表現の馬形埴輪(高井ほか2010、横澤2017)

表 1. 伝白石古墳群出土資料 観察表

図版	種別	計測値 (cm)	調整、特徴等	色調
2図	円筒	残存高：27.4	外面：一次タテハケ調整	Hue10YR7/8
		底 径：33.3	内面：ナナメナデ、タテナデ調整	黄橙
3図 1	形象	残存長：29.9	外面：ハケ調整のちナデ調整	Hue7.5YR6/8
	馬		内面：ナデ調整	橙
			馬形埴輪頭部。面繫粘土紐に鋸歯文。交点に円盤状粘土貼付。	
3図 2	形象	残存長：20.0	両面ハケ調整	Hue7.5YR6/8
	鞍	厚 さ：1.5	鞍形埴輪矢筒部上板か。表面上下端部に粘土剥離痕有	橙

環状鏡板は第IV期に隆盛するもので、第III期では世良田諏訪下 23 号墳例など裸馬に環状鏡板が付される例が多い。また面繫の円盤状装飾は第IV期に出現するもので、環状鏡板とセットで表現されているものに大道西遺跡例や蛇塚古墳例（ともに伊勢崎市）がある。円筒状の頭部成形技法は第IV期でも認められることから、現状では第IV期に比定しうる資料といえる。第III期の資料であれば、環状鏡板+円盤状装飾の飾馬の初現例となる。

IV. まとめ

本市所蔵の伝白石古墳群出土資料を示してきた。いずれも伝資料であり推測の域を出ないものの、円筒埴輪から白石古墳群内の 6 世紀後半の前方後円墳で多条突帯円筒埴輪が樹立された可能性が高いことが明らかとなった。出土古墳の候補となる白石二子山古墳は、墳丘中段に開口する横穴式石室から頭椎大刀をはじめとする多量の装飾付大刀や金銅装馬具類が出土していることで知られる TK43 段階における白石古墳群の盟主墳であるが、埴輪については鞍形埴輪（東京国立博物館 1983）と人物埴輪頭部（群馬県立歴史博物館 2021）が知られるのみで、円筒埴輪については明らかでなかったが、本稿の資料から多条突帯をもつ円筒埴輪が樹立されていた可能性を指摘できる。また、馬形埴輪については製作技法から TK43 段階以降に比定しうるものの、MT15・TK10 段階であれば、その後の馬形埴輪製作に影響を与えた資料といえる。

註

- 1) 平井地区 1 号古墳では 2 条 3 段および 3 条 4 段の埴輪が確認されているが、いずれも底径 16cm、器高は 36cm 前後で段数による差が認められない。
- 2) 神流川右岸に所在する諏訪ノ木古墳（埼玉県児玉郡神川町）では、円墳に多条突帯の大型円筒埴輪を一定間隔で樹立することが確認されているが、同様の事例は極めて少なく、特例的な用法であると考えられる。

参考文献

- 井上裕一 2017 「馬形埴輪の馬具・馬装について」『馬具副葬古墳の諸問題』、pp.15-24、東北・関東前方後円墳研究会
群馬県立歴史博物館 2021 『古墳大国群馬へのあゆみ』
志村哲 1989 「十二天塚古墳の築造年代について—採集遺物からみた築造年代の分析—」『群馬県史研究』第 29 号、pp.1-24、群馬県
志村哲 2019 「十二天塚古墳出土の石製合子」『地域考古学』4 号、pp.129-134、地域考古学研究会
高井佳弘・齊田智彦（編）2010 『大道西遺跡』、（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
東京国立博物館 1983 『東京国立博物館図版目録（関東Ⅱ）』
三浦茂三郎 2017 『群馬県伊勢崎市 雷電神社跡古墳出土埴輪報告書』
横澤真一 2017 「群馬出土馬形埴輪の馬装」『馬具副葬古墳の諸問題』、pp.89-102、東北・関東前方後円墳研究会